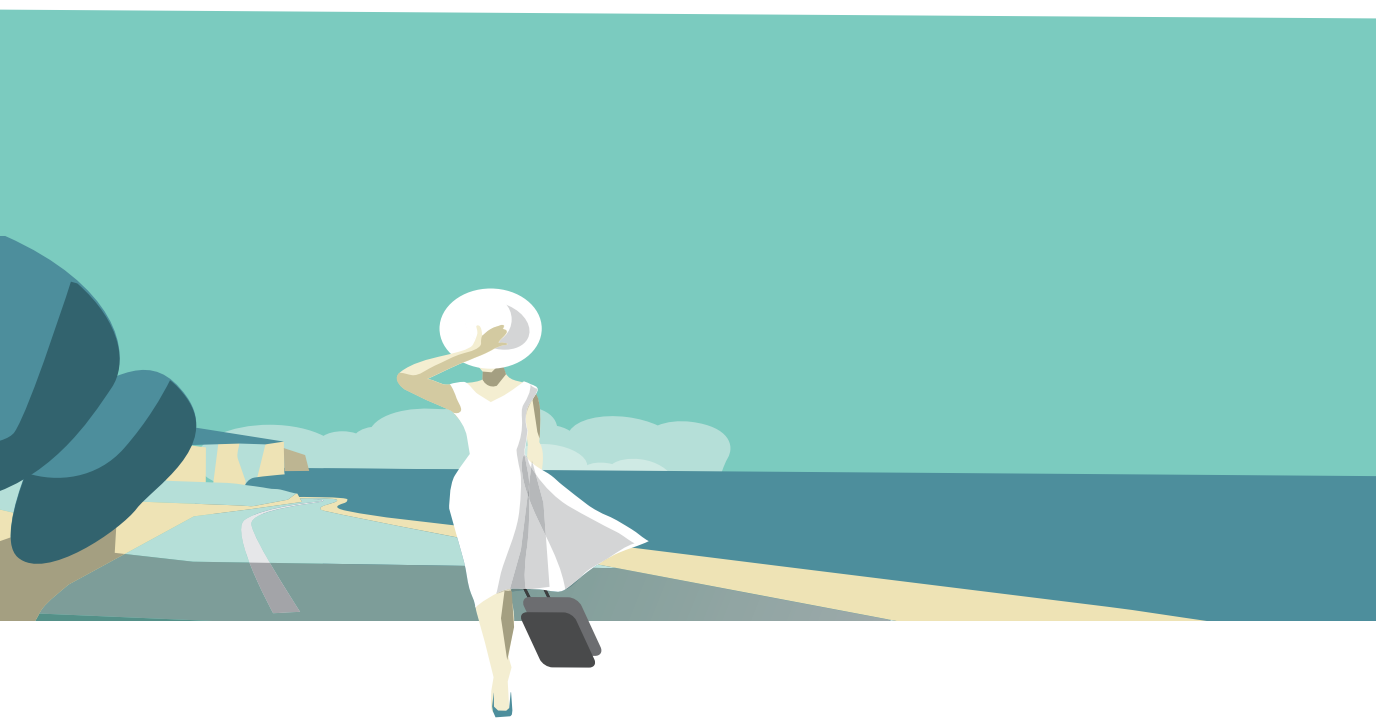
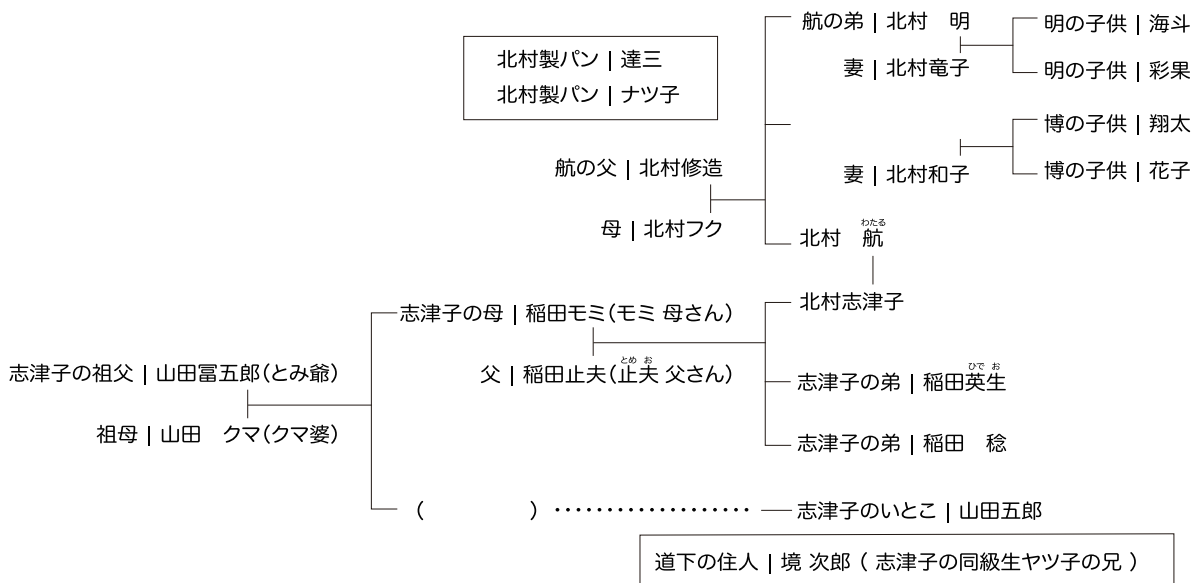






序章 八重小学校前で下車

志津子は、長崎バス本社前から椿の里へ向かうことにした。

乗車券発売窓口で、椿の里方面への時刻を訊ねると、

「只今案内は、八重小学校前ですが、椿の里へ行きなざるなら、次の便がいいですよ」と、親切に言ってくれた。次の便は、終点椿の里となっている。そこからは、椿の里のとみ爺の家は近い。

志津子が、八重小学校前までの切符を求めると、

「八重小学校前から椿の里へは、歩いて15分ぐらい掛かりますよ」

気温が上昇する中をテクテク歩いて行くことになる、と氣遣ってくれた。

「ハイ、有難うございます」

（その15分を歩いて行くことにします）

その道は、八重国民学校に入学してから3年生の夏休みまで、志津子の通学路であった。1年生の4月から終戦まで空襲警報発令と解除が続く中を登下校した。

椿の里集落から6年生のお姉さんと一緒に出発して学校に向かっていくと、

「空襲警報！」

警戒中の村の衆の聲が響きわたった。道路脇に転がり込んで、溝にうつ伏せになり、敵機をやり過した。飛行機は、ふざけたように低空を飛んできて子供たちを震え上がらせた。志津子はその度に泣きじゃくってしまい、「泣き虫！」と、6年生のお姉さんに叱られた。

あれこれ思い出しながらの1時間。

バスは終点八重小学校前に着いた。途中、乗客を拾い満員になっていたがいつの間にか、終点では志津子、一人になっていた。

八重の海は、遙か沖合まで静かに広がっている。磯の香りが漂う。海沿いの道を少し上ると、バス停石切がある。ここから新道に入る。堀切を抜けると黒崎への道

と椿の里への道とがV字状に分かれていく。石切から海岸へ下りる道は、旧道である。そこは長く、椿の里と八重本村を結ぶ道であった。八重本村には、八重小学校、郵便局、役場などがある。多くの人々が往還した。

志津子は、旧道をたどることにした。その道は、遠い昔、志津子の母モミ母さんの通学路でもあった。下りて海沿いの道を少し歩く。すぐ森に入る。小道が緩やかなカーブを描いて奥へと続き、頭上は小枝に覆われ、洩れ日が揺れている。小道に沿って細い流れがある。すぐに椿の里向かう道に出た。椿の里へ続く道は、人と車に固められ白く光っている。

椿の里には、祖父母の家屋敷がある。志津子は、4歳の時、初めて椿の里に來た。祖母のクマ婆ちゃんが寝込んでしまい、モミ母さんが子連れで看病するはめになったからである。この時は、3ヶ月の滞在で終わった。

志津子は、その短い間に様々な体験をした。初めて、動いている牛と鶏をみた。牛は、朝の餌やりが遅れると、太い声を上げて催促した。鶏は、卵を産むとコケコッコと鳴き騒いだ。志津子は、鶏の餌の準備を少し手伝った。それは、屋敷のグルリに生えている草を取ってくるだけであつたが、

「これは駄目だよ。これは鶏が喜ぶ！」

祖父とみ爺が一つ一つ教えてくれた。志津子は、糠に混ぜることのできる草の種類を覚えていった。

ある日、とみ爺は、西の浜からナマコをとってきて、志津子に食べさせてくれた。とみ爺は、庭の新割り用の根株をまな板代わりにして、ナマコを輪切りにしてくれた。志津子は、その塊をしつかり噛みしめた。それは、磯の香りと微かな塩味が混じり合ったシコシコした固いものであった。

再び、椿の里に來たのは、志津子が6歳の時であつた。父稲田止夫とみおに召集令状が來たのである。残された家族は、祖父母の家に疎開することになった。祖父母は既になく、とみ爺の家という空き家だけが残っていた。

そして、終戦。日本の国は、戦いに破れた。稲田一家は、長崎市内に移り住む住宅が見つからず、2年余りを父祖の地で暮らすことになった。志津子が小学校3年生の夏休みに、一家は長崎市内へと家移りした。以後、父祖の地を訪れる機会はなく、歳月は、茫々と過ぎ去った。

椿の里への道は、何も変わっていないようである。人家はない。左右の畑は、ほとんど耕作してない。この地には大きな川がなく、田んぼはない。道は、次第に坂になっていく。道路の右下に井戸が見えてきた。

小学校の2年であつたか、子供会の肝試しの夜、1人でこの井戸に行かされたことがある。空には満月が青々と光り、井戸の周辺の樹々に降り注いでいた。何か出てきそうで怖く、志津子は証拠の井戸水をくみ上げるのに震えたものである。

今、樹々はさつぱりと刈り取られて井戸はむき出しになっている。下りて、冷水で手を洗い、一口、いただいた。この井戸から上は急坂となる。人々はエッキー峠と呼んでいる。峠道の左側は雑木林である。右下は畑が続いている。その先の雑木林の中に、黒崎へと遠ざかつて行く道が見え隠れしている。峠の頂上に登りつく。そのまま真っ直ぐ下るとバスの終点椿の里東である。右の道を下ると用水路道に出る。その昔、梅雨時には蕩々と水が流れていたが、今はその気配もなく雑草が生い茂っている。この用水路道から上に扇状に広がる集落が椿の里である。用水路から右へ伸びる道に人家はない。広い道は遙かに延びて雑木林の先で黒崎への道に合流する。左の道は傾斜地をまわりながら椿の里東の集落に至る。

段々畑と人家の間の小道を縫うようにして登っていく。潮風がふうわりと漂ってくる。西の浜に近づいている。

(もうすぐ、とみ爺の家……)

鎮守様への石段を少し上がる。そこから右への小道をいく。小道の左右の草がきれいに刈り取られている。

(どなたか、山田家の屋敷の手入れをしてくださっている)
少し行くと、とみ爺の家の井戸が見えてきた。浜風が強くなる。とみ爺の家の庭が現れた。

「ああ！」思わず、志津子は、声を上げた。

『故郷の廃家』 そのままの情景である。

傾いた蘆葺きの家、牛小屋、堆肥小屋、農作業用の広い庭、背戸の物干し櫓。
住む人の絶えた屋敷に、潮風が吹き渡っている。

(ここが私の終の棲家なの……)

涙が噴き上がってくる。

(どうして、ここに私一人がいるの……)



第1章 とみ爺の家の青大将 ① 青大将と志津ちゃんの邂逅

久しぶりに裏山から滑り降りて、とみ爺の家に来てみると、志津ちゃんがいる。

(久しぶり、志津ちゃん)

おいらは、とみ爺の家の青大将。集落のみなは「屋敷まわり」と呼んでいる。蛇のこ
とだよ。

(よくきたネ、志津ちゃん)

おいらが志津ちゃんと出会ったのは志津ちゃんが4歳の時さ。とみ爺の連れ合いクマ婆ちゃんが病んで寝込んでしまった時だ。母さんに連れられて、とみ爺の家に看病にやってきたのだ

とみ爺は、牛と鶏とまず生き物の世話をする。牛を使って畑を耕す。堆肥小屋をかき回して肥料作る、と働き詰めで休む暇がない。それに、とみ爺の家は、水の便が悪いんだ。夏場は、屋敷の入り口にある井戸は涸れてしまうので水くみが大仕事だ。とみ爺は、連れ合いの体を拭いてやることもできず、洗濯もできずと、家中は見るも無惨な有様でネ。とみ爺は、一番近くで世帯を持っている娘、モミ母さんにSOSのハガキを出したのさ。「モミ、助けてくれ」と、一行。

とみ爺とは、山田富五郎。クマ婆とは山田クマのこと。山田家は、西の浜の崖の上に先祖代々の家屋敷がある。とみ爺とクマ婆はたくさんの子供を授かったが、大きくなったのは4人だけ。長男は、家業の農業を嫌って、学校を出るとすぐ東京へ行ってしまったよ。一度、大陸で世帯を持ったと便りがあったがそれっきり。行方不明さ。長女は、長崎市内の紡績工場に勤めていた時、野母半島(長崎半島)の人と知り合い、結婚したんだ。手広く農業をしている家で、働き手として期待されたよ。子供が立て続けに生れたネ。大変な状態になっていたネ。その次がモミ、モミ母さんだ。いずれ詳しく話すことにするよ。モミの弟は、漁船に乗っていて、時に遠くまで漁に出向き、減多に長崎の港には帰らない。末の妹は、学校を終わると奉天に渡り、日本人の経営する会社に雇われて頑張っていたよ。

長崎市内で世帯を持ったのがモミ母さんだったよ。椿の里に一番近かったネ。とみ爺からのSOSのハガキを受け取った時、モミ母さんは、3人の子持ちだったんだ。連れ合いを残して、3人の子を引き連れ、はるばる看病に行くことになったということだ。思えば、これが、モミ母さんの苦難の始まりだったネ。おいら、モミ母さんと一緒にいる志津ちゃんから目が離せなくなつたよ。



第1章 とみ爺の家の青大将② 志津ちゃんの家族を語る

志津ちゃんは、稲田止夫父さんが27歳、モミ母さんが24歳の時、長崎市稲佐町で生まれたよ。2年後、妹美千恵ちゃんが誕生したネ。そしてすぐ、長男稔坊が生まれた。『生めよ、増やせよ』の時代だ。止夫父さんとモミ母さんは、国策に忠実だったということだね。冷蔵庫も洗濯機も炊飯器もない時代に、立て続けに子を成して育てることはたいへんなことだったろうと、おいらは思うネ。長崎の言葉で(「乱れ多し」というんだ。たらいと洗濯板で洗い上げた洗濯物を朝、庭先の物干しに干す。夕方、取り込んで縁側に積み上げる。取り込んだ洗濯物を畳んで収納する暇がない。そこで、おしめなどは、乾いた洗濯物の山から引っぱり出して赤子に当てることになる。干し上がった洗濯物は、点検して、しわをのばし、畳んで収納するのが一般的な手順だよ。そこを飛ばして、略式をすると、虫などが付いていることに気が付かない、という事態もあるよ。

「あそこは、今、乱れ多しだから」周囲の人々はその状態を理解し受け入れたものだよ。そんな乱れ多しの最中に、とみ爺からのSOSだよ。モミ母さんは、困り果てたね。月給取りの家だから、牛や鶏はいない。モミ母さんは、4歳の志津ちゃん、2歳の美千恵ちゃん、生後9ヶ月になっていた稔坊を連れてとみ爺の家に行くことになったんだ。その間、止夫父さんは、長兄の家に移って世話になることになったよ。3人の子連れのモミ母さんが、とみ爺の家でどれほど家のことができるか疑問だったが、ともあれ、とみ爺もクマ婆も喜んだよ。志津ちゃんは、背中に着替えの入った小さな風呂敷包みを背負ってやってきたよ。

モミ母さんは、懸命に頑張ったが、クマ婆の病状は一進一退。アツという間に3ヶ月近くが経った。モミ母さんは、一度、長崎に戻る決心をした。とみ爺も渋々承知したネ。すると、ホツとしたのかモミ母さんは、磯に入りたくなった。

明日は長崎市に戻る、という日、モミ母さんは西の浜に下りたんだ。小潮の時刻で、磯は濡れぬれの大小の岩をむき出しにしている。幼い時から馴染んだ西の浜の

磯が「おいで、おいで」とモミ母さんと呼んでいる。美千恵チャンは、クマ婆の傍らで眠っている。モミ母さんは、稔坊を背負うと志津ちゃんを連れて磯にやってきたネ。崖の際の松の木影に、稔坊を座らせ、志津ちゃんに、

「サザエを取ってくるケン、稔坊を見とって……」

と言って、海に入って行ったね。潮の引いた岩の下には、ウニ、馬の糞ガゼ（バフンウニ）、サザエなどがゴロゴロしている。少し先の大きい岩に下には、アワビが張り付いている。なまこもいる。モミ母さんは少しずつ沖へと向かっていったよ。何時の間にか、松の木陰は移動していったネ。太陽は、志津ちゃんと稔坊をじりじりと炙ったネ。

「母ちゃん！」志津ちゃんは、叫んだ。声は届かない。モミ母さんは、ずっと沖合の岩のところにいる。浜の小石が焼けてくる。稔坊が泣き出した。志津ちゃんは、重い稔坊を抱えて日陰まで運ぶことはできなかったんだよ。志津ちゃんは、わら草履を片方脱いで、稔坊の足の下に押し込んで暑さを和らげようとしたネ。自分の素足が熱くなると片足をあげたりしてしのいだ。そのうち志津ちゃんも泣き出してしまったね。

モミ母さんが磯のものをいっぱい抱えて海から上がってきた時、カンカン照りの浜辺で、志津ちゃんと稔坊は2人して大泣きしていた。磯は、人を引き込んでしまう恐ろしいところだよ。

稔坊は、長崎市の家に戻った翌日、急死した。

志津ちゃんは、わけがわからないまま、自分が稔坊を木陰に移すことができなかったなので、弟を太陽に晒さらし、そのため稔坊は死んでしまった、と思い込んだよ。モミ母さんは、自家中毒だったと志津ちゃんに説明したが、志津ちゃんの辛い気持ちは長く続いたネ。痛ましい出来事だったよ。

しばらくして、クマ婆が亡くなった。モミ母さんには、もう母親の葬儀に出向く力は、なかったんだ。

不幸は、立て続けにやってくる。クマ婆が亡くなって1年もたない頃、とみ爺が病んだ。とみ爺は、農作業中にクワを足に打ち込んでしまったんだ。痛めた足を洗い、血止めをした。が、足は、みるみる腫れ上がった。医者に行った時は、もう手当のしようがなかった。すぐ医者に行って消毒薬で徹底的に洗ってもらえばよかったのだが、当時、村人は滅多なことでは医者へは行かなかった。病名は、丹毒。抗生物質なんて無い時代の話だよ。



第1章 とみ爺の家の青大将 ③ とみ爺逝く

「チチ キトク」の電報を手にした時、モミ母さんは、慌てふためいたネ。稔坊、クマ婆、そしてとみ爺、と続く不幸。母親の葬儀には行くことができなかったが父親の死はどうしても見届けたい、とモミ母さんは、思ったよ。当時の電報の危篤は、亡くなったことを意味するネ。

電報を受け取ったのは、梅雨明けの朝のことである。モミ母さんはすぐに実家へ出立することにした。妹のキン（キン叔母）も一緒に行くことになった。キン叔母は、風雲急を告げる大陸から帰国して、長崎市の小さな船会社で働いていた。バ